

文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

⟨6⟩

私が初めて聞く沖縄戦体験がいかに衝撃的だったかを知ることができると思う。

と自覺している。

思い起こしてきただので、わざかながら記憶が残つてい
るのだろう。
特に70年から戦争体験の
夜、疎開小屋内に聞こえて
送つてはいる時、青竜刀こう
もつた「生蠣」の方々の怒り
のこもつたような声が

ながら山道を必死に逃げた記憶も、戦後母との笑い話のタネになつていた。

「難民生活」



中城村久場の戦後引揚者上陸の地の碑の前で筆者、5歳のころ、台湾からここに上陸した

生から戦争の話をまったく聞かれてこなかつた。親戚や近所の人たちからも、この傷痕は弾が貫通したものだという一言以外、沖縄戦の体験談を一度も聞いたことがなかつた。今思え、沈黙が語れない体験故に、支配していた感がする。だが、沖縄戦の体験がないとはいえ、私はアジア太平洋戦争の時代の「空氣」を感じた最後の一人だ。

てきたのは、5歳5ヵ月の
46年11月14日だった(今
年、小渡有得著『小石のつ
ぶやき』(『琉球新報社』で
6日要したことなども確認
できた)。

以前の事柄を若干覚えているので、それも私の記憶の証拠にしている。

た。一兵隊さんか雨の、
あんなに番をしている
泣いたらダメよ」と、
あやされた言葉は、幼
いの数少ない記憶として、
か思い返してきた。
また43年、32歳で現
隊に召集された父は、
に疎開小屋で家族と面
きたようである。ある
衛生兵だった父がぼく
歯を抜くということに
たので、その恐怖心で

機のプロペラを模して、
意げに腕をぐるぐると回し、
歌つたのも忘れ難い。重
幼児として、軍歌はいろいろ
断片的に覚えていた。
しかし、米軍占領下の部
縄への引き揚げ直前、復
してきただが印鑑入れにま
印された部隊名かを小豆で
必死に削っていたのは、
歳になつた幼心に父の功
心が伝わってきたのか、
の記憶も鮮明である。

得て本国沖員刻5怖そ（沖縄国際大学名誉教授）
り遊び仲間に「また台湾の話か」と冷やかされるほど台湾の思い出を口にしつつ、荒廃した島沖縄に密け込んでいた。
戦争の記憶といえばこの程度だったがゆえに、私は多く数の住民から地獄のような戦場体験の聞き取りができたのだろうと思っていました。

沖縄戦体験耳にせず 台湾から5歳で引き揚げ

「難民生活」
ながら山道を必死に逃げた記憶も、戦後母との笑い話の夕になっていた。
さらに遊び友達の家にいく途中、7、8人の「兵隊さん」が大きな木の下で休んでいて、「ぼうやおい」と手招きされ、金平糖をもらった記憶は忘れない。「肩をならべて兄さんと 今日も学校へ行けるのは兵隊さんのおかげです…」という歌は、あの金平糖の思い出と重ねていたのが一番好きな歌で時折口ずさんでいた。
鉄砲を摸した棒を引いで「勝つぞと勇ましく「…」と進行のマネをしたり、「アンアン荒鶯ぶんと

一家は久場崎港に上陸して、殺虫剤のDDTを身体中に撒かれ、米軍のコンセントに収容された。それからまもなく両親の故郷・首里中学校運動場の道向かいにトラックから伯母と祖母と一緒にかかるがから降ろされ、首里赤平の伯父さる一家が住む規格住宅において世話になった。両家あわせて12人が四畳半一間ほどにひしめきあうように暮らす「難民生活」が、沖縄での戦後生活のスタートだった。
革生活からいきなり裸足生活に陥ったので、い

次回は12月12日